

## 三浦梅園の自然哲学

三枝博音

### 第一節 まえがき

自然の世界のどれかの現象についての学問、これを仮りに自然学と呼ぶことにしよう。そうした自然学ならば、日本にも一〇世紀のころにはもうあった。平安朝時代にすでに植物の知識や、人間の日常生活の身近のいろいろの器物の知識についてややまとまったものがあつた。また天文や医療についての少しはまとまった知識にしても、もうその頃からあつた。だから、自然学のありはじめはかなり旧いとせねばならぬ。さて、自然哲学であるが、それは単に自然学ではないから、自然についての知識のある集成があつただけでは、まだ自然哲学が成立しはじめたとはいえない。西欧の学問の歴史では、哲学の始点を「万物の根源は水である」という命題をつくつたといわれるタレス（紀元前六世紀）に置いている。

1  
ありとあらゆるすべてのもの（万物）はという総合的な掴み方をしたうえで更にそれらは「水」という流動性、湿潤性のものから成るといふ統一、的な考え方をしたことに、哲学的な意味があつたから

である。だから西欧の場合はこれでもつて哲学の成立だといえるし、また自然哲学の成立でもあつたといえる。ギリシアのソフィストたちおよびソクラテスより以前の哲学者たちは総じて自然哲学者だといわれていることは、周知の通りである。

### 註

(1) 『枕草子』では、かなり沢山の樹木や花についての、ある仕方(文学的)の種類分けがして出ている。文学にしてもこの種のもの外にもあり、また本草の方面も見落してはならない。

では、日本における自然哲学の成立はどのあたりに置くことができるか。私たちが西、欧、的、伝、統、の、もとにある「自然哲学」概念を使用するかぎり、上述のような、すべてのものについての総合性と統一性のある知識がいつごろから昔の日本の知識者(learned men)たちの発想の仕方に現われはじめたかということ、<sup>(1)</sup> きまらねばならない。ただしこの場合は仏教の教理や思想を考慮に入れないのである。<sup>(1)</sup> 日本の学問は、その組織性のところに注目すると、すべてインドおよび中国の学問のそれぞれのあり方から影響されている。自然哲学もまたそうである。その方で、すぐに問題になるのは、いわゆる儒教における「理気」論、<sup>(2)</sup> 更にさかのぼって求めれば「易」の理論である。前者はあとで触れねばならないがそれは江戸時代に入ってからである。後者は早く平安朝のころから「陰陽五行」の論とともに移入されていたが、天文や暦の説とたいいの場合協在していた。けれども自然哲学を形成するといふほどまとまっていなかった。「自然哲学」の形成には、前述の如くある程度まで知識の総合と統一とが前提になるのであるが、そのいうところの知識がその知識者を取りまく自然の

現象についての観察が少しづつでも何かの具体的な手段によって、やや観測的な性質のものとなつていなければならない。でなくては「自然」(Physis, Natura)ということの意味がないから。おのずからそうなるということを書き表わす「自然」という成語は、自然哲学という自然には充当しないから、これはよほど注意を要する。

### 註

(1) 仏教では、すべてのものを知りとする試みを予定したうえでの統一的な知識を求めていたから、仏教をも加えていえば、問題は別である。たとえば、俱舍論や唯識論はすばらしく組織的な自然哲学をふくんでいる。そして、それは空海(『十住心論』)においてすでにその移入と発展がかなり高度の結実をみせている。しかしこれまで日本の学問史や哲学史では、仏教は例外に置かれているから、今はそれにはふれないことにする。これについては筆者編『日本哲学全書』の仏教篇である第一と第二と第三巻を参照せられたい。

(2) 中国の宋代に始まる。私の論文、Die Entwicklung der Theorien vom 'Ki' (Chi) als Grundproblem der Philosophie im alten Japan”を参照。(Japanese studies in the History of Science, No. 1. に収載。日本科学史学会発行)

かようにみてくると、日本で自然哲学が出来はじめたのは、『乾坤弁説』(“Kenkon Bensestu”)が書かれたころとすべきであろう。この書はヨーロッパの天文説やアリストテレスの四大の説を伝え、四大説と五行の説と比べて批評し、論議の風をおこしているだけでなく、ヨーロッパの天文観測およびその道具についても批評し、さらにそれを天文地理の日本における場合の問題としてとりあげていて、たとえ論説に今日からみて間違いをしていても、とにかくやや具体的な知識の総合性を示

しているのである。この書の成立以後においては、たとえ中国の儒教の弁説に導かれていても、オランダ渡来の天文学説に影響されていたとしても、天文学についての訳述や著述があらわれはじめ、それらの労作者自身の論述のあいだに、前述のような知識の総合性の実例を実際に示したのであるから、日本における自然哲学は少しづつ発達していったといえる。三浦梅園の自然哲学的な学問活動は以上のような日本の学問史のあとをうけて成長したのである。

## 註

(1) 宣教師のクリストヴァオ・フェレイラと日本人の西吉兵衛および向井玄松〔後、元升と改名〕の共同労作である。一六五六年としてよかろう。

## 第二節 梅園の自然哲学成立前半世紀の学問のありさま

自然哲学の歴史的成立には、その知識が、自然現象についての具体的な観察に少しでも裏づけられた総合性をおびるようになり、かつ知識の統一性が試みられるようになっていくことが、必要である。それゆえ、私は梅園の学的活動のなかに自然哲学的知識が生長した頃より前のすなわち半世紀ばかりの時期の日本人の自然についての知識のありさまを、ここで簡単にでもとらえておきたい。梅園において自然についての知識欲が盛んになり、自然哲学的知識の統一性が発展しはじめたのは一七五三年（宝暦三年）<sup>(1)</sup>より数年前からであるとして間違いはあるまい。こうして、私たちは一八世紀の前半を問題にするわけだが、將軍吉宗が学術の発達を政策の一つとしたり、建部賢弘や中根

元圭のような数学の学者を用いたり、天文台を作らせたりしたのは、一七世紀の終り頃だったことを注意しておきたい。このころ中国から伝えられていた本草の学が、文字につけての学から観察にもとづいた博物学的なものへ移った。中根元圭が中国の梅文鼎の『曆算全書』の一部の註釈書をつくった。オランダ語でなく漢文によって西欧の天文・暦の知識を得る道がひらけた。貝原益軒の『花譜』（一六九四年）、『大和本草』（一七〇九年）が出たのもこの時期であった。吉宗が測午儀を作らせたのは一七四五年であり、禁止されていたオランダの書物の移入をゆるめたのは一七二〇年であり、先の『乾坤弁説』の著者の一人の向井元松の子の元成が長崎で北極を測定したのは一七二五年であった。えらばれた少数の日本の学者たちの眼はこうして身辺の自然の現象に向き出した。一七四一年には根来東叔によつて『人身連骨真形図』（烙刑に処せられた二人の男の遺骨を写生して説明を加えたもの）ができるようになったことも見落されぬ。オランダの学術の一斑が、北島見信（『紅毛天地二図贅説』一七三七年）や、おくれて後藤梨春（『紅毛談』一七六五年）などによつてだんだん広く知られるようになった。この外一八世紀の前半において、日本の学者で天地万物の観察に心をよせ、身辺においてもその対象を求め、その認識に努力しだした実例は、以上の外にいくつもあげ得られると思う。宮崎安貞の『農業全書』（一六九六年）のような農業上の自然物の記述や、写生画家たちの登場などもそれぞれ問題になるであろう。

## 註

(1) 『玄語』の「例旨」のはじめ参照。

### 第三節 梅園の自然哲学の成立

その成立は、彼の『玄語』の完成（一七七五年）の前後だとすればよからう。さてしかし、梅園が自然界に向って観測という（従来日本の学者にはきわめて限られた人、限られた範囲でしか試みられなかった）学的行動をはじめたのは、二十歳をすぎて間もなくのころである。というのは、そのころから、地球儀や天球儀を自分で作って測定しつつその方の文献の世界にだんだん深く入りこんで行ったから。顕微鏡もほぼそのころ試作して、自然観察に役立たしている。もちろん、そのころから天体の運行を観察する「推歩の術」には通じていた。彼において『玄語』の思想内容が形をなしはじめたのは三十歳（一七五二年）前後である。このころからこの書がひとまず完成した一七七五年までのあいだに書いた論文や書簡がいくつかあつて、この二、三、四年間に『玄語』の思想は成熟したと考えられる。この間にあつて読み返し、または読みはじめた書物のうち、『易』や『老子』『莊子』『淮南子』<sup>えなんじ</sup> 仏典などのいわゆる儒教や仏教の古典の涉猟は影響の大きいものであつたろうが、朱子以後の理気論の諸家の文を読むことはくわしかつたろうし、また中国古来の天文志や前述の『天経或問』や『曆算全書』のなかの幾部かや、その他西欧の天文学思想を伝え得るものからも知識の収受は大きかつたろう。ことにこの最後のものからの影響は深かつた。日本における学者のうちでは、前述の貝原益軒から書物を通じて、彼の友人であつた麻田剛立からは直接の交渉（すでに二十代からはじまつた）によつて、もっとも大きい影響をうけている。もっとも深い影響をうけた一つとして文献のうへでは『物理小識』をあげねばならない。中国の方以智のこの書は一六三一年刊行

されている。すでにこの書自身が「遠西」の学問の影響をうけている。その内容の特長は、特に注目せられる。その序からあげてみる。

「天地すべて物であり、人間はその中に生れ、その生は身体に、その身体は社会のうちにある。そして人にとってはたらしきとなることすべてが事であり、事も一物である。そういうわけで、器もまた物、心もまた一物である。人は深遠のものを性命というが、性命も物である。天地を通観してみるに、天地も一物である」

というぐあいには書かれている。ここに書かれている「物」をすぐに物質とすることをしないなら、とにかく人間が客観的にものを認識するという仕方において、たいそう認識論的に進んできたことが、注目すべき点である。こうした内容からいっても、梅園の引用度数<sup>(1)</sup>からいっても、彼に少からず働かかけた文献であることは確かである。『物理小識』中の引用書の『淮南子』<sup>えなんじ</sup>や『博物志』の類はまた梅園自身のしばしば引くところでもある。

### 註

(1) 『物理小識』の引用は、『贅語』の前半においてみても十回以上におよんでいる。

右にあげた『物理小識』のなかの「物」概念の明確な成立は、中国の自然哲学史のなかでも新しい思想方法とみてきつつかえないと私には思われる。そして日本における自然誌的または哲学的な学者の諸労作からみても、「物」なる概念の規定は梅園にきてはじめて明確性をかち得ているといえるのである。学問上の諸概念が、西欧における近代的な概念規定づけの方向へと、日本人の思想

方法が進路を向けはじめたという点で、とにかくに梅園はほとんど決定的といえるほどの位置に立っているのである。

#### 第四節 この時期の『玄語』 いがいの梅園の労作

梅園の自然哲学思想は主著である『玄語』のなかに組織的に述べられるが、『玄語』成立の時代、それは二十数年にわたるが、その時代に書かれた三、四の労作にはそれぞれ特長があつて、しかも重要な点で『玄語』の内容を補っている。その労作というのは、(1)『元氣論』(一七五四年)と(2)『多賀墨郷君にこたふる書』(一七七七年)と、(3)もうひとつ、これも前二者と同じく和文であるが、題名の未詳のものである。<sup>(1)</sup>なお、『造物余譚』(一七八一年)や『帰山録』(一七七八年)などもここにあげられる。

#### 註

(1) 『梅園全集』にも載らず、まだ活字印刷にもなっていない草稿本であつて、執筆年代は(2)の年代と同様に安永時代とおもわれる。

『元氣論』は「一元氣」「空」「天地」「陰陽」「寒暑」「水火」「物氣」「機」「数」「生化」「自然而使然」「命」の一二節から成っている。これらのなかの、「空」や「機」や「数」や「自然而使然」などの諸節は、中国の朱子からはじまり王陽明、羅整庵等にいたるまでの天地や陰陽や理氣を論じた哲学者やまた日本の林羅山らしい伊藤仁斎や貝原益軒にいたるまでの哲学者たちとちがつて、梅園



の独自の学説を読みとるにおいて、寄与するところが多い。「空」という曖昧な概念が物質としての空気の概念に持ちきたされて、しかも著者日常の実試<sup>①</sup>にうったえて思索される点など、梅園の自然につけての学問思想をしてはじめて「自然哲学」と私たちをして呼ばしめる根拠をもっている。同様のことは他の諸節についていえる。「数」の節で彼は「数理」を述べるが、次のような思索は私たちの注目をひく。梅園は「数は無数に生じて無数になる。無数即数なり」という言い方をしている。その意味は、一を積んでゆくと一、十、百、千、万というように、乗けていくと、限りがない。限りがないからといって、数はないとはいえない。一を分けて三とする。更に毫、厘、秒、忽というように細かく分けていくともはやイメージにこなくなる（「目みる事能はず<sup>あ</sup>」）。技術的にやっていくにしても、できなくなる。とにかく限ることができない。限られるところがつかめないからといって、無とえば、いったい何を積んで一という数を得るのか。だから、数なるものは無数に生じて無数になるのだ、ということを用いのである。今日いう自然数でもつて押していき、分数も問題にしていず、いわんや一般に彼は今日のいわゆる無理数もおそらくよくは考え得てはいなかったのである。だが、彼の数理の思索は、和算にいう「無量小」の概念に到りたい方向に動いていたものと思われる。彼の影響をどのくらいうけたか私にはまだ何ともいえないが、後述の志筑忠雄の「無量小」論や「ニュートン」に導かれた微分の思想へと（忠雄という日本人の頭のなかで）発展していった跡の、そのはじめを、梅園のこうした数理に見てみても無理ではなからう。

## 註

(1) 団扇うちわを二つ重ねて急にきびしくあげるときのこの二つの物の接着と遊離や、水入(筆硯の器)の二孔と空気の出入の工合や、盾を正面にかざして突進するときの空気の抵抗などを自分で実際に試みて「空といえども、気の充滿する」ことを明かにしている。空隙くうげきをゆるさない思想である。彼は実試のなかのあるものを前述の『物理小識』から得ている。

次に『多賀墨郷君にこたふる書』であるが、この書簡形式の労作(1)でもつて、彼は学問的知識が何であるかを根本的に掘りさげ、「問う」ということの認識論的意味を明らかにしている。自然こそ学問のうえで師であること、文字や書冊に最後の抛りどころがあるのでないことを切々と述べている。私がその次にあげた未発表の草稿では、『玄語』やその他の労作ですでに述べてはいるが、ほんとうの知識のうえでの概念は弁証法的なものであることを巧みに論述している。

## 註

(1) 岩波文庫『三浦梅園集』に収載。

『造物余譚』は彼および彼の学術上の友人の麻田剛立の自然探究の様子を私たちに知らせてくれる文献だが、動物および人体の解剖の実試について語ってくれている。梅園自ら諸動物を剖さくことを記す彼の文章のなかに、読者はつぎのような(ニュートンの『レゲース・フィロスファンディ』〔『哲学するための規則』〕の文を想わしめる)文章を見出すであろう。

「唐もろこしの山のあなたに立つ雲はここにたく火の煙なり」。またつぎのような文章もある。「異なる方より観れば、猫は猫、犬は犬、物ごとと同じからず、同じき方より観れば、猫犬の目の見ゆる理も、人の目の見ゆる理も、……其理に相違あらじ」。ニュートンが日本のこの哲学者よりすぐれているのは、彼が「近代の人々〔科学者をさす〕は物の実質的のいろいろの形だの曖昧な性質だのをいちおうのけておいて、自然の現象を数学的法則へともつていこうとする」といつて、自然界のいろいろの雑多な物の形態と定めがたい性質とはさわらないで、自然の法則を幾何学的計算で示そうとしたことにある。これは西欧の近代科学のすばらしさであつて、梅園はそこまではとてもいかなかつた。しかし、梅園がすぐれていたのは、法則的命題をつくり、概念を規定し放つしにしないで、更にそれらの概念の弁証法的かんけいをつかもうとしたことである。すなわち彼が「反観の理」と呼んだものである。「水車の一半は去つて遠ざかり、一半は来つて近づく。道は異れども居は只一転の内にある」というのは、その真意である。反対や対立という論理的かんけいの「転」のうちにある真の意味をつかもうとしたことは、彼がどの労作のなかでも強調したものだつた。上の引用文のなかの「居」というのは、今の用語でいえば、そのほんとうの「場」はというくらの意味であろう。転ずるからこそ、「去る」と「来る」との反対物があるので、転ずるといふこの現在の作用しているそのままの、つまりその場をつかむことをしつつ、全体を知ろうというのが彼の狙いである。これを『玄語』のなかでは、論理的に細かく規定づけをしつつその論を展開している。

## 註

(1) ニュートンの『プリンキピア』の第七巻。そこには、太陽も家のかまどの火も別に変りないこと、アメリカで落下する石もヨーロッパでのそれも変りはないことが書かれている。

(2) 『造物余譚』の「聞書」参照。

以上のような『玄語』以外の諸労作のなかに、彼はそれぞれ特長ある思索を書き残している。

### 第五節 『玄語』の構造

この書が大著であることは、「四冊七本、例旨〔凡例〕を併せて凡そ八本、十余万言、一百六十有余  
 図。前後を通じて歴年二十三。換稿も亦二十三」と書いてあるのでわかる。かなり量のある凡例  
 の外に、本宗というのがある。私たちのいう序論にあたる。そのあとがいわゆる本文であるが、こ  
 れが三つに分れて、天冊、地冊、小冊となっている。なぜ三つにしたか。それはこう説明されている。  
 「天地というのはつまり宇宙である。〔宇宙にしても私たちに手近な物にしても〕物の筋みちがはっ  
 きりとおせる面とそうでなくすぐにはと、おらない面〔経通と緯塞〕とがある。前者では普通の時間  
 の観念で通じるが後者はそうはいかない。それで前者のように叙述できるのを「立」と呼び、そう  
 でないのを「活」と呼ぶとして、まず天冊は「立部」と「活部」とからなることになる。地冊もまた  
 そうなるが、同じ論理が、地冊は天冊同様にはいかぬから、一方を「露」と呼び他方を「没」と呼ぶ。  
 〔確立しているものはつきり露呈しているが、何よりも働いているもの「活」は、さきの「転」そ  
 のもののごとく露呈してくれないから、「没」として言い表わすがよい〕。天冊はその一が活部とし

てあるが、これはまた二つに分けて「天」と「神」とにわけて説かれている。立部の方は「神」と「本」とにわけてある。「天」「神」「本」なぞの概念は、梅園独特のもので、青空の天てんでもなく神さまの神しんでもなく、それぞれ論理学的意味が規定されている。たとえば、形にうったえられる宇宙は「天地」の語をあてるが、そうでなく、それが「没」的であるときは「天地」の代りに「転持てんち」の語があてられる。「さて、宇宙の外に、なんとしても人間が問題になるが、これを小冊でとりあつかう」。

小冊においても、さきの立活と露没のような違いがあるから、二部に分れるべきで、その一つは「物」の部と呼ばれ、他は「人」の部と呼ばれる。「たとえば物体に比べれば、人間はそのように簡単明瞭でなくて、すなわち「立」でなく「露」でなく、むしろ「活」であり「没」である。それゆえ、ここでは「物部」と「人部」にわけられる」。かようにして、『玄語』は天と地とについての大冊と、人間についての小冊との二部からなるともいえる。「立」「露」「物」などの側に属する概念として「絜」というのがあり、「活」「没」「人」などの側に属するものとして「混」というのがある。絜とは分析されてはつきりしたもの、混とはそうはいかず、それをつかむ手続きが込み入っているべきものをさす」

### 註

(1) 『三浦梅園の哲学』の「玄語の構造」参照。

『玄語』の構造は終始彼の弁証法的方法によってつくられているといわねばならない。

『玄語』のなかにも彼が自然の諸現象について観察し得たもの、中国や日本の文献から知り得たものを、それらをそれぞれの構造上の位置につかせて叙述しているが、詳細なものは『玄語』の補としての『贅語』のうちに組み入れられている。『贅語』も『玄語』とほとんど同じくらいな大著である。さて、最後に『玄語』の内容上の構造について述べておかねばならぬ。

ヘーゲルの『自然哲学』を例にとつていうなら、彼はヘーゲルの論理的叙述の方法として、ものが「ある」(ザイン) こと、ものが「現われてある」(エアシャイヌンク) こと、ものが実際に「現象作用してあること」(ヴェイルクリツヒカイト) というように、考察していく。こうした考の仕方が、彼の自然哲学でもとられている。彼は(1)メハニーク、(2)フィジーク、(3)オルガニークと、いうように組織した。この三つを力学論、物理論、有機論というように訳すと、かえってわからなくなる。(3)を彼は主観性の規定、(2)を個別性の規定、(1)を併別性の規定というようにしている。(3)は『玄語』でいえば、第三の「人部」にあたり、(2)は第二の「地部」、(1)は第一の「天部」にあたるということがいえる。早い話が、ヨーロッパで力学というと、その学の中までは天体力学の認識や、これとほぼ同じように取り扱える地上の物体間の物的運動が論じられるが、<sup>フィジーク</sup>物理学というと、そのなかでは自然の世界の<sup>フィジクス</sup>実際に現象している、変化しゆく物質的な物々の関係が論じられる。ヘーゲルの(3)のオルガニークでは(これは普通のオルガニークと少しゆき方が違うけれど)最後には生死という問題まで取り扱われる。これがヘーゲルの自然哲学の構造である。『玄語』の「天部」「地部」「人部」の構造は、とにかくヨーロッパにその似た例をとるかぎり、ヘーゲルをあげねばならないであろう。梅園は「人部」では、生物の知識、生命についての知識、人間

のそれらについての知識まで展開する。梅園の自然哲学はとにかくヘーゲルの自然哲学に比べてみることのできるくらいのところまで、できているのである。

なお、もつとヘーゲルの自然哲学の論理的やり方に親近しているのは、どの部で取り扱う根本概念も弁証法的であることである。梅園からいうと、小物の構造がほんとうに理解せられれば大物のそれも容易に理解せられる。「玄」なるものを理解するには、どこから始めてもいいのである。それはなぜかという、彼にすれば「条理が燦然とわかれ」ていても、物の「没」性をつかまえようとすれば、分析して「燦」性からそれをみねばならず、物の確立のさまを分析的につかまえるには、その認識者において「没」や「混」の統一的な点から了解しとる力量がそこに働いていなければならぬ。それを「没をあぐれば則ち露したが、露をあぐれば則ち没したが」と言っている。だから、『玄語』はどこから手をかけて呼んでもいいとすら言っている。このことはヘーゲルもまた主張するところだった。ヘーゲル流に言えば、そこから(an)手をつけるところ(fang)がはじめ、(Anfang)である。『玄語』の弁証法的性質はこの書のもつとも大きい特長である。

#### 註

(1) 分析して明らかにしてみようとしてもできないもの、早わかりするように言えば、深遠のものでも人がわからせたいとしている哲学の最後のもの、というくらいの意味。

## 第六節 日本の自然哲学的思想の発展史のなかの梅園の位置

日本の場合に限るとして、梅園より前には自然哲学といつていい学問体系はなかったといつていい。しかし、いろいろの学者たちによつて、分散的にもう用意されつつあったということは見落してはならない。山鹿素行や伊藤仁斎や貝原益軒など特に注意せられる。たとえば、素行のつぎの文章（『聖教要録』一六六五年）などは、梅園の労作のなかに少しく改めれば、ほとんどそっくりのものを見出すことができる。「条理有る、之を理と謂ふ。事物の間、必ず条理あり。条理紊るるときは、則ち先後本末正しからず。性及び天、皆理と訓ずる、尤も差謬せり。凡そ天地人物の間、唯自然の条理有る、是れ理なり」。条理という概念を強く押し出したのは梅園である。また、よくいわれる陰陽五行につけていうと、「五行は陰陽の既に形するなり。五の者は天地の間に行はるる所以なり。陰陽は氣にして、五行は形なり。更に作為を待たず。水火は五行の主なり。水火、象有りて形無し。相對待流行して万変尽く。五行に生数・行数有り、又相剋有り。天地人物の間、相剋對待して相生ず。生と剋と、循環して窮まり無し」というような例である。あちこちに、体系的思索を通らないではあるけれど、もう自然哲学的な考えは出始めていた。しかし、たとえば、論脈がととのつたものがあつても、そこに出てくる知識が、実際の自然観察にためしてみても、学問を形成するというようにいつていかなかった。なお、その上に、梅園ではどの労作でも、知識とは何か、学問とは何か、何が主観性的先入観かということを明らかにすることに力が注がれている。こうした点をあげてみると、とにかく自然哲学は梅園において成立したといつて、差支えないのではなからうか。

さて、『玄語』のあとであるが、もうヨーロッパでは、自然哲学の解体のきざしが現われはじめていた。ニュートンが彼の主著を『自然哲学』と呼んだことは重要なことである。しかし、名を自然



哲学と呼んだものの、内容とそれの明瞭なる独立とは、もう自然哲学という概念規定の変改を要求している。ニュートンにならつて、カントが彼の「自然哲学」をつくつたことも重要ではあるが、もう一八世紀の終りから一九世紀にかけては、自然現象の個々の科学が確立しはじめ、自然哲学は自然諸科学よりはまったく別の領域をもたねばならなくなったことは周知のとおりである。梅園のあと、自然哲学の名に値する労作は、志筑忠雄の『暦象新書』（二七九八—一八〇二年）である。この書の思索の特質は、内容はすでにニュートンに負うてはいるが、梅園の哲学の流れに属する。たとえば彼が粒子間の引力についての所論のごとき「氣」の概念でもつてすすめていくやり方は、まったく梅園の仕方に酷似している。範を「易」にとる点も同一である。こうして、梅園のあとは忠雄によつてこの学が發展されたが、そのさらにあとは、これらにつぐものを見出すことはできなくなっている。人は帆足万里の『窮理通』（二八一〇年）をあげるべきだといふかも知れないが、この書の著者が梅園をはるかに学問の師としているにしても、そして光学においてははるかにすすんでいるにしても、忠雄の『暦象新書』のあとで、日本の自然哲学を發展させた労作とはいひがたい。

かようにして、梅園はたしかに日本の自然哲学史のなかでユニークの位置をもつているといわねばならない。私は、さきに学問の体系をもつた自然哲学書のことには言い及んだが、そのさい私は安藤昌益の『自然真営道』をあげべきであつたであろう。この書の「自然」は西欧の伝統のなかにある、あのフィジクス（変化しゆく物々としての自然界）の意味よりは、どうしなくてもそうなりゆくという意味の自然性をめあてとして思索されていて、自然科学へのびてゆく自然現象の知識を觀察的に得て積んでいくという面が欠けていた。これをも合わせ考えて、梅園の自然哲学は理解され

るべきではなからうかと、思うのである。

- 
- 『三枝博音著作集』第五卷（一九七二年十月、中央公論社）所収。
  - 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
  - PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2}_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}v\text{i}p\text{d}f\text{m}x$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiromeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。